(別紙)

成果の説明書

| (氏名)　岡田知之 | (学部)　経済学部 |
|---|---|

１　重要事項

長年続いた不況により定着したデフレは、経済活動を活性化させるうえで大きな阻害要因になっていると考えられており、政府は、重要な課題の１つとしてデフレ脱却への取り組みを進めている。また、日本銀行も「異次元金融緩和」をおこない、デフレ脱却をおしすすめている。

このような状況をふまえ、本学の産業研究所ではデフレプロジェクトが実施されることとなったが、このプロジェクトへ参加させていただくことになった私は、現在、物価や貨幣に関わる問題、特にオーバーラッピングジェネレーションモデルを用いた貨幣的な均衡に関する考察を行っている。

オーバーラッピングジェネレーションモデルの用いた貨幣的な均衡に関する考察は1980 年代に盛んに行われ、例として Wallace(1981) や Chamley and Polemarchakis(1984)を挙げることができる。彼らは、次のような議論を行うことにより、ある種の金融政策は、実体経済に影響を及ぼさない可能性があることを示唆した。その議論というのは、まず貨幣的な均衡を提示し、その後、ある種の金融政策が行われたとしても、もとの貨幣的な均衡で達成される資源配分を実現できるということを示すというものである。Wallace(1981)や Chamley and Polemarchakis(1984)は、他の資産と比較して流動性が高いといった貨幣の持つ特徴を前提とせず、貨幣を他の資産を同じように取り扱って分析を行っている為、彼らの分析結果は、見ようによっては限定的と言えるかもしれない。しかし、異なる金融政策のもとで同じ資源配分が達成される可能性があるという結論は、十分に興味深いものであろう。

このような考察、とくに Wallace(1981)の考察を検討したとき、私は次のような疑問を感じた。その疑問というのは、貨幣的な均衡の一意性についてである。Wallace(1981)や Chamley and Polemarchakis(1984)は、異なる金融政策のもとで同一の資源配分がもたらされる可能性を示唆したが、もし貨幣的な均衡が複数存在するとすれば、異なる金融政策のもとで、複数ある均衡のうちどの貨幣的な均衡が実現するかはわからないことになる。もしそうであるならば、貨幣が資源配分に影響を及ぼしにくい条件を前提としても、貨幣が経済を不安定化させる要因となりうることになる。私は、もし可能ならば、Wallace(1981)のモデルを前提として、貨幣的な均衡が複数存在する可能性があることを示したいと考えている。現状では、まだ十分な結果が得られていないが、今後もしばらくは、この考察を続けてゆく予定である。

２　その他の事項